

愛知県立第二中学校『学友会報』第二十四号（大正五年三月）について

―尾崎士郎「本校を出づるに臨みて諸子に告ぐ」の発見―

倉橋 真司

《資料紹介》

愛知県立第二中学校 『学友会報』 第二十四号（大正五年三月）について

—尾崎士郎「本校を出づるに臨みて諸子に告ぐ」の発見—

倉橋 真司

はじめに

令和三年五月、偶然にも大正五年三月に発行された愛知県立第二中学校『学友会報』第二十四号<sup>(1)</sup>に接する機会に恵まれた。この小冊子は、同校の学友会が編集・発行した雑誌の一冊であるが、当時五学年に在籍していた尾崎士郎や大須賀健治が卒業に際して執筆した寄稿文が掲載されており、大正四年度の諸活動の報告においても、尾崎や大須賀に関する新たな知見を得ることができると期待される。ここに掲載された尾崎の寄稿文は『尾崎士郎全集』<sup>(2)</sup>には収録されておらず、作品集の著作年譜などにおいても取り上げられていないことから、新出である可能性が高い。また、中学校時代の尾崎に影響を与えたとされる、友人の大須賀の人物像を知る貴重な手がかりでもあると考えられる。

本稿は、所蔵者の許可を得て『学友会報』第二十四号を紹介するとともに、その内容をもとに中学校時代の尾崎や大須賀の新たな一面を明らかにしようと試みたものである。ぜひ多くの方々々に御叱正を賜りたい。

なお、引用資料における旧字体・異体字等は常用漢字や正字に改めた。

一、愛知県立第二中学校と尾崎士郎



図版1 愛知県立第二中学校（大正4年以前撮影）（個人蔵）

尾崎士郎は、『人生劇場』で知られる昭和を代表する小説家である。明治三十一年（一八九八年）に愛知県幡豆郡横須賀町（現西尾市）に生まれ、横須賀尋常高等小学校（現西尾市立横須賀小学校）、愛知県立第二中学校（図版1・現愛知県立岡崎高等学校、以下「愛知二中」と略す<sup>(3)</sup>）を卒業して、大正五年（一九一六年）四月に早稲田大学に進んだ。その後の小説家としての経歴については、『尾崎士郎全集』を始めとした数多く

の著作における年譜にまとめられており、その青年期は自伝的小説の『人生劇場』（青春編）の主人公である青成瓢吉に投影されていることは周知のことである。

中学校での登場人物は、尾崎が在学していた愛知二中の教師や友人とともに創作されていることが知られており、校内の描写にも当時のバンカラな校風がよく反映されている。尾崎自身も中学校在学中より雑誌『第三帝國』や『世界之日本』に寄稿して、中央論壇の人々の知遇を得たり、校内弁論大会で活躍したことで知られ、優等生ではないが正義感が強く、弁論を得意とし行動力がある、というイメージはほぼ定着しているといってもよい。<sup>(4)</sup> 大学進学後は大正六年に起きた早稲田騒動に学生代表として参加し、同八年には大学を中退して社会主義運動に接近していくことになった。しかし、中学校時代の尾崎の足跡をたどることができる同時代の資料は実は少ない。そのイメージは尾崎自身に書いた回想記と、『人生劇場』（青春編）によるところが大きい。同時代の資料としては、尾崎が明治四十三年四月から大正五年三月までの六年間在学した、愛知二中の『校務日誌』、『学籍簿』などの学校資料や『学友会報』などの学友会誌が挙げられるが、同校の校舎移転や第二次世界大戦による空襲被害などの影響もあって、断片的にしか確認することができない状況にある。

昭和六十二年（一九八七年）に愛知二中の後継校である岡崎高等学校が創立九十年を迎えた時に『愛知二中 岡崎中学 岡崎高校九十年史』（以下『九十年史』と略す）が編纂されることになり、編集委員会は尾崎が在学していた六年間の学友会誌の蒐集に努めた結果、大正元年『学友会報』と同四年『両公記念号』の二冊を入手することができた。『九十年史』では、この二冊に見える尾崎の寄稿文や短歌、校内活動の記録のほか、同級生の

回想などの資料をもとに「大正初期の中学生生活」の節において十頁に渡って尾崎の中学時代について記述している。<sup>(6)</sup> また都築久義はこの二冊の『学友会報』に見える尾崎の寄稿文を紹介し、とりわけ大正四年『両公記念号』に寄稿した「徳川家康公論」が、後の尾崎の歴史小説の理念に通じると指摘した。<sup>(7)</sup> 尾崎自身の手による資料は少ないものの、『九十年史』は大正期の愛知二中の状況を愛知県の教育資料や当時の新聞記事、卒業生の回想などを駆使してとても詳しく記述しており、同盟休校や校内暴力グループである「龍虎団」<sup>(8)</sup> の存在にも触れていて興味深い。尾崎が在学していた大正初期の愛知二中は、『人生劇場』（青春編）に描かれた中学校以上にバンカラな校風であったようである。尾崎はこの中で弁論に打ち込んで、校内の「名士」と目される存在になり、また友人の大須賀健治の影響で社会主義思想に触れるとともに、英語教師の繁野政瑠（天来）<sup>(9)</sup> との交流を通じて文学的な開眼を得た、というのがこれまでの一般的な理解であったといえるだろう。

## 二、『学友会報』第二十四号の概要

『学友会報』第二十四号（図版2）<sup>(10)</sup> は、愛知二中学友会が、大正五年（一九一六年）三月二十九日に発行した小冊子である。編輯兼発行者は額田郡岡崎町の柴田顕正、<sup>(11)</sup> 印刷は名古屋市西区の一誠社、冊子のサイズは縦二二・五センチメートル、横十五センチメートル、厚さ五ミリである。総頁数は一四四頁で、冒頭四頁を使って大正四年十一月十日に行われた大正天皇の即位礼の勅語、内閣総理大臣大隈重信の寿詞、同年十二月十日の大正天皇の聖旨、同年十二月十一日の文部大臣高田早苗の文部省訓令第八号が掲げ

られている。一、二頁が目次となっており、「我が校の大典記念事業」、「我が校の御大典記事」、「学校日誌」、「講演」、「論叢」、「文藻」、「韻文」、「部録」、「卒業生通信」によって構成されている。大正四年に行われた大正天皇の即位礼を厳肅に祝う校内の雰囲気を感じ取ることができる。

この大正五年の『学友会報』第二十四号は、前節の『九十年史』や都築久義の紹介には取り上げられていないため、昭和六十二年の編纂段階では蒐集できなかったと考えられ、岡崎高等学校には所蔵されていない。岡崎市立中央図書館には、愛知二中と岡崎高等学校の学友会誌のバックナンバーが所蔵されているが、通常号では大正六年刊行の『学友』が最古であり、この号は所蔵されていない。西尾市の尾崎士郎記念館と東京都大田区の尾崎士郎記念館にもいずれも所蔵されていない。また都築久義の数多くの著作にも引用されていないことから見ても、この小冊子そのものが新出である可能性が高い。なお、尾崎在学中の学友会誌は、前節の『九十年史』の段階では大正元年『学友会報』と同四年『両公記念号』の二冊が確認さ



図版2 『学友会報』第二十四号（個人蔵）

れたのみであったが、この大正五年『学友会報』第二十四号の所蔵者は、このほかに明治四十四年二月十一日発行の『学友会雑誌 行啓記念』第九号も所蔵している。筆者も拝見する機会を得たが、明治四十三年十一月十九日の皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）が行啓したことを記念した特別号となっており<sup>12</sup>、巻末の「光榮に浴せし職員及生徒氏名」の第一学年乙組に「尾崎士郎 幡豆平」の記述が確認できる。これが愛知二中の学友会誌に見える尾崎の初見記事である。この年尾崎は数学と体操の点数が悪く落第<sup>13</sup>、翌年二度目の第一学年を過ごすことになるが、ここで大須賀健治と出会うことになった。現時点において尾崎在学中の学友会誌は、大正二年（第二十一号）、同三年（第二十二号）、同四年（第二十三号）は未確認のままである<sup>14</sup>。『九十年史』に引用されている大正元年（第二十号）の豊富な記事より見ても、何らかの寄稿をしていた可能性が高いが、今後の発見を待つほかない。

愛知二中の学友会誌は創刊以来『学友会雑誌』と称したが、大正元年の第二十号より『学友会報』と改称され、大正六年には『学友』となったことが分かる。『学友』は、大正十一年に愛知二中が岡崎中に改称された後も昭和十八年まで継承されたが<sup>15</sup>、後長く休刊し、戦後に岡崎高等学校で昭和三十三年に復刊されて現在に至っている。

### 三、尾崎士郎の寄稿文と事績

『学友会報』第二十四号における「論叢」は五学年一名、四学年二名の合計二三名の在校生代表によるものであり、五学年代表の寄稿文の中に尾崎士郎「本校を出づるに臨みて諸子に告ぐ」がある<sup>16</sup>。前節で指摘した通

り、新出の可能性が高いので、以下に全文を紹介してみたい。

【資料1】

本校を出づるに臨みて諸子に告ぐ

第五学年 尾崎士郎

昔、中唐の詩人に浪仙といふ人があつた。彼は三年を費して、『独行潭底影、数息樹辺身』といふ二句を得た。此詩は彼自ら誇て、千古不朽といふ丈けあつて、いか様意味深遠、浅劣な吾々の俗眼を以てしては到底其文字に顯れた意味すら了解する事が出来ない。然し、それは兎も角、彼が此詩を得るに三年の長年月を以てしたといふ事のみを以てしても、吾等は浪仙の苦心に對して十分の敬意を払ふ義務がある。然るに当時の人々は、彼の苦心に對して何等の報酬も払はなかつた。否、反て人々は彼に卑陋な漫罵を浴せかけた。

浪仙素より詩を以て、文学を以て生命と為す。確乎たる信念だにあらば千万人の罵倒、世を挙げての嘲笑、素より物の数ではあらぬながら、縦令知己を千載に求むる文学者として、詩人として、同じき国に生を享けて、同じき国の人々から誤解せられ、酷遇せられて嬉しかる可き筈は無い。浪仙は自己の慘憺たる苦心に對する世人の漫罵に對して、遺憾極りなく、再び筆を握て一詩を賦した。

曰く、『兩句三年得、一吟双淚流、知音如不賞、歸臥故山秋』と。私は靜かな夜此詩を三誦する毎に涙の滂沱として頬に伝はるを覚ゆる。千載に知己を求むるは止むを得ざる時の決心。凡そ人生知己無き程悲しく淋しきはあるまい。知己を求めて止まざるの意は、永恒に於て我と人と一ならんと

する要求あるが為ではあるまいか？

扱て、六百の学友会諸兄、少し長くはなつたが、私は以上に於て人生と知己といふ事に就て具體的の例を挙げて説明しました。而して諸君は私の友人であり、私の知己である—恐らく私が独断的に斯う言つたとて誰れ一人異議を申出でらるゝ方はありませんまい。

道は道に依て賢し、去らんとする者の悲哀は去らんとする者ならでは之を知る事は出来ない。而も私は、今や私の自ら以て友人とし、知己とする君等と別れねばならぬといふ悲しき立場に立てゐるのだ。望見すれば、私の行く可き地は千里万里茫茫として遙かである。恐らく、再び私に若き中学時代が還る迄、私には兄等と握手し得るの日はあるまい。悲しき矛盾(?)ではあるが、然し乍ら人生は嚴肅なる事實である。諸君よ、私は今去らんとする。去らんとする者の心は世界中にありとあらゆる形容詞を持ち来るも、之を形容し尽す事は出来ない。昔人の言つた言葉に、鳥の死なんとするや其鳴く声悲しく、人の逝かんとするや其言ふ事善し、といふのがある。

私は日本の土に生を得て今に到る迄悠々十九年、而も責任のある場合に於て虚言を吐いた事は一度もない。去らんとする時に於てのみ私の叫びは善ではないか、然し乍ら、人生別離の悲哀を味ふの時は少し。生れて先づ第一に会した別離の悲哀を抱いて、私の心に亦諸君に贖するの言葉無き能はずではないか?、さり乍ら、私は学才共に乏しき者である。学才共に諸君等より乏しき私は、諸君に教ふ可き何物も持たない。私の言ふ事は平凡であり、私の語る事は既に諸君の耳に出入する事多かりし語であるかも知れない。然し、真理には常に生命がある。よしんばそれが万人に共通したる語なりと雖も、徳川家康の語りしものと、尾崎士郎の語りしものとの間には、自ら甚しき相違のある事を知らねばならぬ。

然らば私の語る事、私の諸君に残さんとするものは何か。答えは極めて簡単である。曰く、「汝自らを尊敬せよ」。諸君、私の諸君等に与ふ可きメタルは、正しく此の僅かなる文字に外ならぬのであります。

嘗て私の先生が私に言つた。君の崇拜する英雄は誰です乎と。其処で私は答へた。私は総ての人間を尊敬します、然し未だ一人も崇拜する英雄はありません。すると先生は言つた。然らば最も尊敬する英雄は？。此処に於て私は直ちに西郷であると答へた。先生は私の答を非常に喜んで、盛に西郷の偉大を説いた。それから言ひました。君よ、大南洲たらずんば小南洲たれと。其時私は昂然として言ひ放つた。先生よ、私は小南洲たらんよりは寧ろ大尾崎士郎たらん事を望みますと。

親愛なる諸君、若き諸君が世の英雄豪傑に対して憧憬の眼を放てられる事に対しては、私の痛切に愉快を感じるものであります。然し乍ら諸君よ。諸君は断じて盲目的英雄崇拜者たる勿れ。私は日露戦争の時日本が産んだ殉難志士沖某氏を崇拜して、脅迫罪で拘引せられた青年あるを知つてゐます。又高杉東行に私淑して、無理に嫌ひな酒を啣つて暴れてゐた友人を有てゐます。以上の例証は極めて卑近なるものではありまするが、以て英雄崇拜の如何に危険なるかを語るものではありませんか。と言つても私は決して英雄崇拜を斥ける者ではない。唯個性を没却したる盲目的、奴隸的崇拜だけは断じて不可なりと言つた迄であります。

諸君！人間には各々個性がある。而して此個性を扶助し開發して行く事に於てのみ人生の意義があるものであります。僕等が英雄を模倣するは僕等の個性を完成する手段に過ぎないと言ふ事を考へなさい。既に人である以上、長所もあれば短所もある。苟も短所を捨て長所を取るならば、人間何ぞ英雄と凡人と扱ふ所がありませんか。故に私は総ての人を尊敬します。

元来、世に顕れたる英雄なるものは、英雄の総計では無いのである。或は世には英雄たる可き素質を有し乍らも、能く英雄たり得なかつた者もある。又は境遇の力に左右せられて空しく大器を抱いて斃れた者もある。彼をして英雄たらしめば是も亦英雄なり。運不運を以て豈人間の価値を断定するを得んやと言ひ度くなるではありませんか。

諸君よ！希くば総てを汝の自我の中に堀掘れ。英雄崇拜も、愛国主義も、すべて汝自らの心に出でたるものに非ずして何の価値かあらん。故に私は言ふ。諸君よ、個性の扶成は兄等が一生の事業である、と。

私の言つた事は甚だ雑多に岐れて、或は要領を得る事が出来なかつたかも知れない。然し、真面目に聞いて下さつた諸君は、無論一条の道理が流れてゐる事を御看取下さつた事と思ふ。よしんば、私の語があまりに陳腐にして聞くに堪へなかつたといはれる人があらうとも、それは私の問題では無い。私は唯思ふ事だけを言へば足りる。

素より一人でも真の知己を見出すならば、何の光栄か是に過ぎん。と言つて、知己無くとも私は浪仙の語を藉り来る程老人でも無い。別れの言葉としては甚だ唐突ではありますが、私の心から出たものたる事に依て、一字正に千金に値すると自負しても僭越ではあるまいと愚考します。

卒業を前にして、尾崎が愛知二中の後輩たちに残した言葉である。校内の「名士」の一人として自信と誇りに満ちた説得力のある文章である。中唐の詩人浪仙の詩の一節から始まり、「汝自らを尊敬せよ」、「個性の扶成は一生の事業である」と説く内容には、尾崎自身の六年間の中学校生活が反映されていることは間違いないだろう。そこには、それまでの自らの孤独な歩みに対する達成感と寂寥感、来るべき未知の世界への期待感と強い

決意を感じ取ることができる。学校側が五学年代表の一人に尾崎を選んだのも、個性を豊かに発揮した彼こそが、後輩たちに人間的な成長を促すようなメッセージを伝えてくれる人物であると高く評価していたからであろう。

『学友会報』第二十四号には、「部録」においても尾崎の活躍が記載されている。まず「学友会役員」一覧において、講演部と雑誌部の委員に尾崎の名を確認できる。<sup>(17)</sup> また意外なことに「大正四年度徒歩部記事」においても五年の部員欄に尾崎の名がある。<sup>(18)</sup> 徒歩部とは現在の陸上競技部に当たるが、運動部にも所属していたことが分かる。続く「大正四年度講演部報告」には第一学期において、「四月十六日、家康忠勝両公三百年祭祀記念講演会を開く。柴田、下村両先生の講演に先ち、林千太郎、尾崎士郎両公に関する演説をなす。」と見える。この年の四月に学友会が刊行した『両公記念号』に掲載された「徳川家康公論」を、生徒代表として講演したものと考えられる。<sup>(19)</sup> 五月二十七日に校内の講堂で講演大会が開催されているが、この時尾崎は弁士としては出場していない。しかし、六月以降の活動には次のように数多く登場する。<sup>(20)</sup>

### 【資料2】

六月十五日、第五学年教室に於て講演小会を開く、聴衆室に溢る、演題及び弁士左の如し。

- |           |   |       |
|-----------|---|-------|
| 一、南国発展    | 五 | 尾崎士郎  |
| 二、人生の一部   | 五 | 栗木海城  |
| 三、体格をよくせよ | 五 | 林 甚太郎 |
| 四、偶感      | 四 | 佐久間 進 |

- |           |   |      |
|-----------|---|------|
| 五、活動せよ    | 五 | 川端正夫 |
| 六、偶感      | 五 | 外狩保二 |
| 七、人生は世路の旅 | 三 | 都築源作 |

- |      |   |      |
|------|---|------|
| 八、戦争 | 五 | 柴田朝雄 |
|------|---|------|

討論会組織 第五学年生有志相談の上討論会を組織し五年生有志を以て会員となし、本学期に於て三回開会す、回は回を追ひて形式整ひ、内容亦見るべきものとなりたるは誠に喜ばしきことなり。討論題左の如し。

- |                      |
|----------------------|
| 第一回 文明の進歩は人生の幸福を来すや否 |
| 第二回 日本人は何処へ発展すべきか    |
| 第三回 独逸の将来            |

### 第二学期

十一月三十日、講堂に於て講演大会を開く。弁士及演題左の如し。

- |                 |     |      |
|-----------------|-----|------|
| 一、青年の覚悟         | 一、甲 | 平井公平 |
| 二、忠孝            | 二、丙 | 田端国雄 |
| 三、寄宿舎の歌合唱       |     | 舎生一同 |
| 四、心の修行          | 二、甲 | 中村正次 |
| 五、切腹の意義         | 三、丙 | 近藤康男 |
| 六、唱歌（神洲男児）      |     | 一年生  |
| 七、御大典紀念         | 三、丙 | 都築源作 |
| 八、奮励せよ青年        | 三、乙 | 河上 満 |
| 九、詩吟（残月）（霜満軍営）  |     | 三年生  |
| 一〇、吾人青年         | 四、乙 | 石川良平 |
| 一一、開運栄達の要道とは何ぞや | 四、丙 | 金森義徳 |

一二、詩吟（鞭声）（蹈破）

四年生

一三、吾人の革新

五、乙

安藤嘉七

一四、英語演説（アルフレド王と猫）

三、甲

築山欽次

一五、唱歌（箱根山）

二年生

一六、英語会話（青い鳥）

説明者

尾崎士郎

チルチル

美甘義夫

ミチル

松田竜一

ザ、フェアリー

小島伝三

一七、詩吟（煙鎖）（天草洋）

五年生

一八、覚醒時代

五、乙

尾崎士郎

### 第三学期

一月十八日、学芸競技会を開く。

(1) 学科目及程度左の如し。

(中略)

(3) 優等者

国語科（六名）

一年之部

二等

一、乙

中根真之<sup>(真)</sup>

(中略)

四、五年之部

三等

五、乙

大須賀健次<sup>(ママ)</sup>

作文科（三名）

一年之部

二等

一、甲

鈴木忠一

二、三年之部

一等

三、丙

近藤康男

四、五年之部

二等

五、乙

尾崎士郎

大正四年度は、四月に家康忠勝両公三百年祭記念講演会の代表になって以来、校内で目覚ましい活躍をしていたことが分かる。六月に五学年の有志によって組織された討論会の中心に尾崎がいたことは間違いないだろう。十一月の講演大会は大正天皇即位の御大典記念行事の一環として開催されたものと思われ、弁論の合間に各学年による唱歌や詩吟の合唱や英語会話などの余興を盛り込んだプログラムとなっているが、尾崎はその最終弁士を務めている。三学期においても学芸競技会においても作文科で二等に入賞している。

この年は校外誌においても、「中学と師範との改革」（『第三帝国』第三十六号 大正四年四月五日）、「先づ教えよ」（『世界之日本』同年六月号）、「帝国主義者に与ふ」（『第三帝国』第五十号 同年九月一日）、「尾崎行雄氏の為に弁ずー八月号を讀みて岩崎英祐君に教ふー」（『雄弁』同年九月号）などの掲載が確認できる。<sup>(21)</sup>最終学年における尾崎は、校内において名実ともに教師や在校生から一目置かれる存在であったことは間違いないだろう。

### 四、大須賀健治の人物像

『学友会報』第二十四号における「論叢」の第五学年の寄稿文には、尾崎士郎に並んで、大須賀健治「本校を去らんとして」が見える。大須賀健治は社会主義活動家の山川均の甥に当たる人物であり、尾崎が中学校在学中に多大な影響を受けたことで知られている。実家は額田郡藤川村で綿布



工場を営んでおり、伯母の大須賀里子はアメリカ留学の後、東京女子医学  
校で学び、山川と結婚した人物であった。『人生劇場』（青春編）に登場す  
る、藤川宿の大きな木綿問屋の次男で小説家志望の二木は、大須賀をもと  
に創られた人物であることは明白であり、岡崎駅での瓢吉との別れのシー  
ンは印象的である。尾崎自身も後の回想の中で、中学校卒業後は共に新し  
い時代に進路を切り拓くことを誓い合い、上京して早稲田大学に入学した  
後は、大須賀と一緒に山川を訪ねる手筈になっていたと述べている。<sup>(22)</sup>しか  
し、大須賀は二木のように早稲田の英文科に入ることとはなく、結果的に長  
男として家業を継ぐことを余儀なくされ、実家から出ることを許されない  
まま、不幸にも昭和十二年十月に三十九歳の若さで急逝した。<sup>(23)</sup>尾崎が『人  
生劇場』の成功で流行作家として名声を高めていた頃、昭和十年七月に刊  
行された、岡崎中『同窓会報』の大須賀の職業欄は「綿布製造販売業」と  
記されている。<sup>(24)</sup>著書に『三河平野』があり、中学校卒業時に親友の尾崎と  
共に進むことができなかつたことを悔やむ記述がある。<sup>(25)</sup>

大須賀健治に関する愛知二中時代の資料は尾崎以上に少なく、その人物  
像は不明な点が多いが、今回紹介する『学友会報』第二十四号は、大須賀  
の寄稿文が極めて豊富であり、素顔を知る貴重な手がかりとなる。まずは  
「論叢」の寄稿文を紹介してみたい。<sup>(26)</sup>

### 【資料3】

本校を去らんとして

第五学年 大須賀健治

春短し何を不滅の命ぞ。斯くいきまきし詩人の心もさりながら、吾が戸崎

野に於ける若き日の四年は既に逝きぬ。

ふりさけ見る遠山には、未だ白雪皚々として冬の峻烈存すれど、南枝の野  
梅漸く綻び初めて黄鳥歌ひ、冬枯れの沈黙を守り居し樹々も仄かに生気を  
宿し、五度目の春また立ち帰らんとして三春の行楽に耽るの時はさまで遠  
しとせず。而うして諸君と別るべき時の近づけるなり。吾れ校を出で、  
或は西に東に流浪の漂泊見たらむと雖も、赤き夕陽に對する時、將た紺碧  
の空仰いで冥想せん時、必ずや思ひは馳せて吾が若き日を育くみたりし戸  
崎の野に及ぶべし。また其時、余は必ず諸君の健在と母校の發展とを祈る  
ならむ。三河に人無しとの嘆声を他所にして、吾が母校より偉人傑士の駢  
出せんこと、是れ余が切に願つて止まざる所とす。余今秃筆を揮ひて以下  
數言を綴らむとするは、実にこれあるが為なり。鶏の裂かるゝに臨みて叫  
ぶや悲しく、人將に死なんとして其の云ふや尊し、去らむとして絶叫する  
余が言葉にも、亦何等かの価値ありたきものなり。過去五年を背景に演出  
されし吾が校の歴史を追憶して現状を觀るに、年を逐ふて校風は面目を新  
にし来れるに、運動部の不振は何ぞや。庭球部能く戦ひて、東阪に岡崎有  
りと関西に豪語せし往年の佛も今は偲ぶに難く、野球部の殆ど滅亡せんと  
する状に接しては余坐ろに愁然たり。徒歩部の八高に名を成せしと、柔道  
部の猛者揃ひは稍見る可きも、剣道部道場に竹刀の響き寂し。斯の如く我  
が運動部は校風のそれと反比して、逐年衰頽し行かんとす。宜なる哉、六  
百健児に生氣乏しきことや。

余は若く熱烈を佳しとする者、元より氣を説くや久し。然るに三河に生れ、  
三河山河の感化を受けて、自らも三河武士の後裔を以て任ずる本校健児に  
して些の生氣無しとせば、噫、三河の前途危い哉。

口を開けば郷国の光榮を説き、胸に雄図壯んなりといへど、心身剛健の士

に非ずして何ぞ能く大事を成し得んや。

運動部の盛衰と全校健児の意気とは密接なる関係を有す。意気壯んなれば天にも勝つ、三河人士が大なる使命を果たすは易々たることなり。

故に吾人先づ強者となりて三河人たる旗幟の下に大いに為す所有り、三河の生気を鼓舞せむとせば、宜しく運動部の隆盛を計り、以て覇気ある健児とならざる可からず。本校健児にして生氣あらば、三河の地を導くは易し、吾人出でずば傾く郷土の悲運を如何にせん、使命は重く健児は眠る、熱烈の士は警鐘を打ちて覚ませよ。

尚ほ余は本校弁論部の振はざるを嘆く者なり。

思ふに腕の時は既に過ぎ、是れに代りし筆も亦雄弁に駆逐せられんとしつ、ある現状ならずや。

而して西に東に全国の津々浦々に至るまで、之が謳歌の叫びは高きに、本校に於て之を唱ふる者甚だ稀なり。春秋二季の講演大会ある毎に、余は多大の感興と期待とを持ちて臨み来りしに、滔々懸河の弁に接したること未だなし。又屢々中京の舞台に聯合大会ありと聞けど、本校より弁士を派遣すとの掲示に接したることなし。何が故に然るや。

余は全校健児に告ぐ、諸子また宜しく雄弁の人たらざる可らず。

余本校に就て弁士を求むるに、未だ真摯に努力するの士に見えず、唯一の尾崎氏ありて時々快心の弁を試みるありと雖も將に去らんとす。彼を除きて他に月旦の価ある者なし。此に於て尾崎去りて後、第二の尾崎無きを如何にせん。

霜夜橋上に声を練り、大自然に対して怒号し、將た鏡前姿勢を工夫し、以て雄弁家となり、壇上校風の鼓吹に努めんとする士は無きか。懸河の熱弁よく懦夫を起たしむるの士は出でざるか。

雄弁はまた覇気鼓吹に大いなる力あるものなり。

要するに三河武士の後裔として恥ぢざらむと努むる諸子は、外部社会の風潮に鑑み、内部校風の改善に力を尽すべきなり。

また「韻文」においても、次の短歌を「大須賀健児」の名で寄稿している。<sup>(27)</sup>

#### 【資料4】

生くるしるしに

大須賀健児

これやこの京の四条ぞたづね来て河の灯を見る旅の子よ吾れ  
秋雨の静かにけぶる四条橋河面眺めて行くをんなあり  
憧れし旅に出づる日小春の日すゞる草鞋の脚もか軽し  
朝やけの黄雲ゆるゆる流れゆく山の彼方の友が家かも  
何事か大いなること遣しおき死んでしまわむと思ふことあり  
夏なれや山の深緑、空の碧、若人と云ふがしみじみうれし  
夕陽赤し、渚づたひに故郷の漁村へ帰る友偲ばる、  
誇らしきテニスの選手終りけり憂ひの四年涙の四年  
大いなる我が責め今ぞ果てたるに頬をつたわるは何の涙ぞ

大須賀は中学校在学中庭球部の主力選手として活躍した。続く「部録」に見える「大正四年度庭球部記事」は「健児狂生」「球の児生」の名で十四頁にも渡って、小説風の文体で諸大会の記録が綴られているが、この筆

者も大須賀である可能性が高い。大正四年度における愛知二中庭球部の活躍は目覚ましく、そのすべての大会において大須賀は五年級の代表として出場した。とりわけ京都の第三高等学校庭球大会と名古屋の第八高等学校庭球大会に学校代表として遠征したことは、とても誇らしい出来事であったことが「部録」の文面や「韻文」の短歌より窺うことができる。明治四十二年から四十五年にかけて黄金期を築いたメンバーの一人で、八高に進学した鷹部屋福平が<sup>(28)</sup>応援に駆けつけてくれたことも感激の出来事であったようだ。「論叢」において執筆者の一人に選ばれ、意気揚々と運動部を鼓舞する文章を寄稿することができたのも、庭球部における目覚ましい活躍への誇りと自負があったからであろう。講演部（弁論部）の中心として活躍していた尾崎を高く評価していることから見ても、校内において「庭球部の大須賀」と「講演部の尾崎」は話題の人であり、一目置かれる存在であったことを窺うことができる。また第三節において見たように、大須賀は三学期に開催された学芸競技会においても、国語科の四、五年の部で三等に入賞している。

これまで、尾崎との関わりの中で取り上げられる大須賀は、「社会主義運動家である山川均の甥」という独特な境遇から受けるイメージのみが先行し、具体的な人物像や素顔は不明なままであった。しかし、今回紹介した新資料から見えてくる姿は、郷土と母校を愛し、健全な精神と気概を持つ文武両道を実行した誇り高き人物であり、『人生劇場』（青春編）で描かれる文学少年の二木の姿とも異なっている。この『学友会報』第二十四号は、尾崎の親友である大須賀健治の中学校時代における新たな一面を明らかにしている新資料であることは間違いない。

## おわりに

新出の愛知県立第二中学校『学友会報』第二十四号は、同校の学友会が大正五年三月に編輯した小冊子であるが、大正四年度における校内状況を知る上での貴重な資料である。本稿は、ここに掲載された当時五学年であった尾崎士郎と大須賀健治の寄稿文や、彼らに関わる部活動の記録、学校行事の記事を紹介するとともに、これらを手がかりに、新しい尾崎と大須賀の人物像を明らかにしようと試みたものである。その結果、中学校最終学年において、尾崎は講演部、大須賀は庭球部とともに活躍し、学芸競技会でも国語や作文で学年上位の成績を収めるなど、校内で教師や在校生から一目置かれる存在であったこと、その業績だけでなく個性や人間性が評価されて、「論叢」の学年代表に選ばれ、彼らはそれに応えて教師や在校生に向けて誠実にメッセージを贈ったことを指摘することができたと思う。

これまで尾崎の中学校時代は回想記によるところが大きく、弁論や校外誌への投稿によって学校批判をして要注意人物とされ、その後も学校への不信感の高まりの中で同盟休校や自主休校に関わりながら、仲間からも心理的に離反していったという流れで説明されることが多い。<sup>(29)</sup>これは自伝的小説『人生劇場』（青春編）にも矛盾しないため、すべて事実であると考えられてきた。しかし、今回の新資料によって復元できる最終学年の尾崎や大須賀の姿は、従来のこの理解とは大きく異なっている。特に「論叢」の二人の寄稿文は、達成感と自信に満ち溢れており、一事業を成し遂げた先輩が、自らに続く後輩たちを鼓舞する内容となっている。学校に批判的な思想を持ち、社会主義思想に傾倒した要注意人物が、大正天皇即位の大

典記念号の学年代表に選ばれるはずはないし、ましてや同盟休校や自主休校の首謀者が代表として適任であったはずもない。彼らが学年代表に選ばれたのは、純粹にその活動が愛知二中の学友会が目指す生徒像に合致していたからに他ならないであろう。

今回は新出の尾崎と大須賀の寄稿文の紹介にとどまったが、本冊子に見える学校行事等の記事と尾崎の回想記の記述を対照させると、様々な矛盾点があることに気付く。この点についての考察は別の機会に譲ることしたい。また、本冊子は大正天皇即位の礼における愛知県下の中学校の動向を知ることができ数少ない資料の一つでもあり、近代教育史研究に益する貴重なものである。この点についても十分に触れることができなかったが、今後の課題としたいと思う。

- (1) 『学友会報』第二十四号は個人蔵。愛知県内の古書店で購入したという。表紙に「三浦蔵書」の印影があるが、由来は不明である。
- (2) (1)では『尾崎士郎全集』全12巻（講談社 一九六六年）を参照した。
- (3) 愛知県立第二中学校は、明治二十九年（一八九六年）に愛知県第二尋常中学校として開校され、同三十二年に愛知県第二中学校、同三十四年に愛知県立第二中学校（以下「愛知二中」と略す）、大正十一年に愛知県岡崎中学校と改称し、昭和二十三年に新製の愛知県立岡崎高等学校となった。本稿における愛知県立第二中学校の学校史についての記述はすべて、愛知県立岡崎高等学校創立九十年記念事業実行委員会編『愛知二中 岡崎中学 岡崎高校九十年史』一九八七年（以下『九十年史』と略す）による。なお、図版一は尾崎が在学した明治末年〜大正初年の愛知二中校舎を撮影した新出の絵葉書である。絵葉書は個人蔵で、所蔵者の許可を得て掲載した。
- (4) 『人生劇場』（青春編）については、『尾崎士郎 坂口安吾集』現代日本の文学26（学習研究社 一九七一年）を参照した。ここでは「評伝的解説」を尾崎

秀樹が書いている。

- (5) 代表的な回想記としては、尾崎士郎『小説四十六年』（講談社 一九六四年）、日本経済新聞社編『私の履歴書』文化人2（日本経済新聞社 一九八三年、一九六三年六月に紙上に連載されたものを再掲、以下『私の履歴書』と略す）などがある。
- (6) 『九十年史』p.185～194
- (7) 都築久義「尾崎士郎 愛知二中学友会報寄稿文」『愛知淑徳大学国語国文学』10号（愛知淑徳大学国文学会 一九八七年一月）
- (8) 『九十年史』p.297～303 なお『人生劇場』（青春編）にも「龍虎隊」の名称で登場する場面がある。
- (9) 繁野政瑠は明治七年、徳島県に生まれ、第三高等中学校を経て東京専門学校（現早稲田大学）に学び、坪内逍遙の薫陶を受けた。天来の雅号で新体詩を『早稲田文学』に発表し、明治三十六年に単著『ミルトン失楽園物語』、『ダンテ神曲物語』を出版した。愛知二中には明治四十一年より大正五年まで英語科の主任教師として勤め、のち台湾の台北中を経て、大正十年に高等学校英語教員検定試験に合格、早稲田高等学院教授、早稲田大学教授となった。昭和八年に文学博士となり六十歳で死去した【『早稲田百人』別冊太陽NO29（平凡社 一九七九年）p.6787～88】。尾崎は『小説四十六年』を始めとした多くの回想記の中で、繁野に大きな影響を受けたことを記述している。なお、明治四十三年の愛知二中『学友会雑誌』第十九号には皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）の行啓を祝う繁野の英文の詩が掲載されている。
- (10) 図版2は筆者が原本調査の際に撮影し、所蔵者の許可を得て掲載した。
- (11) 柴田顕正は明治六年、愛知県に生まれ、國學院を卒業して石川県尋常中学校七尾分校を経て、明治三十年より同三十四年、同四十三年より大正八年まで愛知二中に勤め、国語を担当した。退職後は岡崎市立図書館長を務めながら、独力で『岡崎市史』と『徳川家康と其周囲』を出版した。昭和十五年に六十六歳で死去した（『九十年史』p.173～175）。愛知二中では明治四十三年より大正八年まで、学友会の雑誌部理事として学友会誌の編集を担当しており、柴田が中心となって編集した大正四年『両公記念号』に、尾崎は「徳川家康公論」を寄稿し、同年春の講演会では柴田と共に講演している。また大正四年度は雑誌部

委員を務めており、柴田との接点を確認できる。

- (12) 『学友会雑誌』第十九号については、写真岡崎高等学校七十年史編集部編集発行『写真岡崎高校七十年史』（一九六六年）p.28～29に写真と内容の一部が掲載されている。『九十年史』にもこの写真が転載されているが（p.157～159）、行幸以外の記述はない。あるいは『九十年史』段階では原本が確認できなかった可能性がある。

- (13) この経緯については、都築久義「尾崎士郎の落第—中学時代の人間形成」『愛知淑徳大学論集 文学部・文学研究科篇』第三十五号（愛知淑徳大学 二〇一〇年三月）が詳しい。

- (14) 大正四年に刊行された『両公記念号』は特別号として編集されたものであり（『九十年史』p.170～172）、通常号として第二十三号が発行された可能性が高い。

- (15) 筆者が原本を確認している愛知二中における最古の学友会誌は、『学友会雑誌』第九号（明治三十五年十二月）である（個人蔵）。現在、岡崎高等学校に所蔵されているバックナンバーは、大正五年以前では大正元年のみである。その他、愛知県図書館に第十四号（明治三十九年）が所蔵されており、『愛知県史 資料編35 近代12 文化』（愛知県 二〇一二年）三九六に、第三号（明治三十三年四月）の記事が引用されている。

- (16) 「論叢」に寄稿しているのは、掲載順に加藤憲吉、尾崎士郎、柴田時之助、松田竜一、久米広吉、梶剛、花田正一、大須賀健治、中島敏雄、川端正夫、安藤嘉七（以上五学年）、竹中泰郎、石川良平（以上四学年）の一三名である。

尾崎の寄稿文はp.33～37に掲載されている。

- (17) 学友会は総務部、運動部、剣道部、柔道部、野球部、庭球部、徒歩部、水泳部、蹴球部、相撲部、学芸部、図書部、講演部、雑誌部、調査部、会計部、作業部より成り、各部に理事（教師）と委員（代表生徒）が置かれていた。委員は部員の中から複数選ばれることになっており、尾崎は大正四年度においては講演部と雑誌部の委員を務めていた。「論叢」に寄稿している生徒のうち、一名は、剣道部、柔道部、野球部、庭球部、水泳部、図書部、講演部、雑誌部の委員を務めていることから、学友会の各部の代表的な委員を中心とした人選であったことが分かる。なお、繁野政瑠は総務部理事と運動部部長、柴田顕正は雑誌部

理事にその名がある。（p.100～101）

- (18) 徒歩部において尾崎は部員としてその名が見えるが、選手として校外の大会に出場していない。（p.129～130）

- (19) 『両公記念号』は、愛知二中学友会が大正四年四月に岡崎城跡の龍城神社で行われた徳川家康、本多忠勝両公三百年記念祭に合わせて刊行したもので、教師八名、生徒六七名を含む総数八十一編、二二六頁にも及ぶ記念論集であった（『九十年史』p.170～172）。編集担当の柴田顕正と下村初男はここに論文を寄稿している。尾崎の寄稿文は、徳川家康を批判した内容となっているが、生徒代表に選ばれたのは柴田の推薦による可能性が高い。なお、前掲註7）に全文が掲載されている。

- (20) 「学校日誌」によると、「五月二十七日 講堂にて海軍記念式を挙ぐ、了つて生徒の講演会を開く。」とある。この日は海軍記念日に当たるため、生徒講演会の論題も日露戦争や日本海海戦に関するものが多い。引用した「大正四年度講演部報告」はp.132～137にある。講演部の主な活動は五月と十一月の校内講演大会と一月の学芸競技会の運営であった。学芸競技会は、算術科、代数科、幾何科、三角法科、地理科、歴史科、英語科、会話作文科、国語科（書取）、作文科、漢文科、博物科、物理科、化学科、習字科、図書科、体操科より出題範囲を予告して、応募者に競わせる学力コンテストである。一等から三等までが優等とされ、二月に商品が授与されることになっていた。大正四年度の応募者数は国語科三一名、作文科一六名であったことが分かる。なお、尾崎が何度も登壇した愛知二中の講堂（明治三十年竣工）は、現在も岡崎市針崎町に保存されている（国（文化庁）の登録有形文化財）。

- (21) 尾崎が中学校時代に校外誌に発表した文章については、都築久義『東海文学紀行』（中部日本教育文化会 一九七九年）p.157～172に引用されている。このうち「中学と師範との改革」『第三帝国』三十六号（大正四年四月五日）が、尾崎の回想記や年譜に取り上げられる「教育亡国論」であると考えられる。四学年に在学していた尾崎が、主催者である茅原華山に送った手紙がそのまま掲載されたものであり、中学校教師を痛烈に批判した内容となっている。「すぐ掲載され、新聞に仰々しい広告が出たために、学校内で物議を起こした」と回想記にはあるが（『小説四十六年』p.16）、本文の冒頭において茅原は「十八に

為る中学生に告げます。私は貴君の名を省きました。(中略) 没分曉の教師に危険思想視されては気の毒だと思つたからです。」と断つた上で、手紙の名前を「○○○○」と伏せている。校内で直ちに問題になつたとは考えにくい。なお、「先づ教えよ」(『世界之日本』大正四年六月号) は同誌が創刊五周年を記念して募集した懸賞論文で、応募総数三二八編の中から三位に入賞した。選者は早稲田大学教授の永井柳太郎であり、早稲田大学進学の契機となつたことはよく知られている。

(22) 『私の履歴書』p.294による。「大須賀との人間関係が、私の思想傾向を社会主義的な方向へとみちびいたことだけは確かである。」とあるように、早稲田在学中から売文社に出入りするきかつけを与えた人物であることは間違いない。

(23) 都築久義「級友・大須賀健治」『風紋』十三号(一九七八年)のち『東海文学紀行』(中部日本教育文化会 一九七九年再録)p.131-140の記述による。先行研究で大須賀の生涯やその人物像について触れたものではこの論考が最も詳しい。中学校時代の尾崎と大須賀が二人並んで撮影した写真が掲載されているだけでなく、大須賀の著書『三河平野』が多数引用されており、資料的にも貴重である。

(24) 山本鉄太郎編輯兼発行『同窓会報』(愛知県岡崎中学校同窓会 昭和十年七月)p.37

(25) 前掲註(23) p.135。

(26) 大須賀は大正四年度においては、庭球部の委員を務めていた。寄稿文はp.48-50に掲載されている。

(27) 韻文に詩を寄稿している生徒は七名であり、大須賀の詩はp.98に掲載されている。

(28) 鷹部屋福平は明治四十五年卒業で八高から九州帝国大学へと進み、北海道帝国大学教授、工学博士となった。戦後も九州大学教授、防衛大学教授を務め、日本庭球協会副会長などを歴任した【『新編岡崎市史 総集編』(新編岡崎市史編集委員会 一九九三年)】。愛知二中在学中は庭球部選手として大活躍したという【『九十年史』p.183】。大正四年当時は八高在学中であり、十月十七日に開催された八高庭球大会に大須賀が出場した際、激励に来たことを示す記述が確認できる(p.127)。

(29) 『九十年史』p.183-194など。尾崎自身も『私の履歴書』の中で、「卒業を間際に控えてはいたが、私は中学を退学して自分の出所進退を明かにする決意をした。」と述べている(p.289)。

(30) 大正天皇即位の礼は大正四年十一月十日に行われたが、「学校日誌」によると、その前後の十月二十八日〜十一月十五日にかけて、御真影奉迎、奉戴式、天長節祝賀式、竹田宮殿下台臨(「ヒマラヤスキ」御手植)、名古屋での函簿拝観、停車場での皇太子殿下行啓の奉迎、御即位奉祝式、奉祝提灯行列、皇太子殿下還啓の奉送、大嘗祭講話、天皇陛下還啓の奉送、拝賀式、大典式場拝観などの関係行事が連日行われている。当時愛知県下には県立中学校は五校のみであり、全校教職員と生徒による函簿拝観と奉迎、奉送の役割が与えられたのである。直接の記事はないが、正門の門柱が初代の木造から石造へと建て替えられたのも、この時である可能性が高い。この石造門柱は現在も岡崎高等学校の正門として使われているが、建造年代はこれまで「大正前期」とされてきた。(愛知県HP「平成29年3月10日発表 登録有形文化財(建造物)の登録について」<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/bunkazai/touroukubunkazaitenzoubutsu.html> 資料4 2022年11月10日閲覧)。

(仙台育英学園)